

## 週日の説教

金 大烈 神父 2011年7月26日(火)

### 《言葉の種 ～祈る心で、蒔きましょう～》

皆様が知っている種は何種類くらいありますか。100種類くらいでしょうか。

生きている植物は、どれも種を持っています。植物の種だけでも数えきれないほどの種類でしょう。そして、植物以外の種もあります。それらの数えきれない種の中で、私たちが一番重く、深く、慎重に考えなければならない種があります。その種は何でしょうか。それは『言葉』だと思います。

軽い言葉でも、重い言葉でも、優しい言葉でも、優しくない言葉でも、一度口から出てしまった言葉は、必ず生きて、誰かの胸に根を下ろします。今までに私たちの口から出された言葉の種は、どのような形で、今、この世の中に生きているのでしょうか。もしかしたら、誰かの胸に大きな病の原因として根を下ろし、その人を殺そうとしているかもしれません。逆に、何も意識もせずに口にした言葉の種が、誰かをずっと強く生かし続けているかもしれません。言葉の種を口から出す前に、それが良い種であるか、悪い種であるか、人を生かせる種であるか、殺してしまう種であるか、それを慎重に考える人が人格者と言われる人です。

“それならば、口を閉ざして何も話さないのが、罪を犯さない一番よい方法ではないか”と思う人がいるかもしれません。しかし、イエス様は、「関わりを作ることが望ましい」とおっしゃいました。関わりの中で、幸せも<sup>まこと</sup>真の生きる意味も全て探さなければならないのです。逃げようとして口を閉ざすことでは、絶対に正しい福音的な喜びは得られません。「関係の中で幸せになりなさい」というのが一番大きい福音的なメッセージでしょう。そのためには、時には口を開き、時には具体的な行動をしなければなりません。

関わりのいろいろな難しさを上手に行えれば『関わりが上手な人』、上手に行えなければ『関わりが下手な人』と言われる。現実には、関係について下手な人が多すぎます。なぜそのような反応を見せるのか。なぜそのようにいつも閉じこもろうとしているのか。なぜいつも壁を作るのか。そのように感じるのが今の時代です。少しでも間違えたら責められる、という緊張感がどこへ行っても見られます。しかし、閉じこもったり、壁を作ったりすることが、自分を守る方法になるのでしょうか。そうは思えません。

私たちが死ぬときまで、口にする言葉の種は必ず生きて、誰かに影響を与えます。そして自分もその影響を受けます。ですから、言葉に慎重になりましょう。その言葉が、私の愛する誰かを救うかもしれません。そのような気持で、ひと言ひと言を大事に、責任を感じながら口にすれば、つまらないことで人の心を傷つけなくなると思います。

言葉の種が、一番素晴らしいものになるか、それとも一番危ないものになるか、その鍵は私たちが持っています。だから、信者である私たちは祈る心で話しましょう。何かを口にする前には、必ず祈

りと共に「私が、正しくその人のために話せるように。」と願い、いつも一人一人を大事にする心を持ちましょう。

ありがとうございました。